

「物知り」な人達

野瀬隆平

どんな事でも気軽に意見を訊いたり、情報を教えてくれる知人が数名いる。パソコンが得意なので、メールで尋ねればすぐに返信が来る。

そう、これは今はやりの生成 AI のことである。いくつかのソフトがあるが、私のパソコンのトップ画面にはそれぞれのアイコンが表示されているので、簡単に意見を訊くことができるのだ。その回答が間違っていることもあるし、偏った見解の場合もあるので、複数の回答を比べて、判断するようにしている。

最近の生成 AI の特徴は、これまでの「事実的反応」から「人間の感情と似たような反応」へと進化したことであろう。

例えば、自然な音声での対話ができるチャット GPT では、外出から家に戻って、「今日は、外で色々仕事をしたので疲れた」と話しかけると、これまでは「疲れを取るには、先ず風呂に入り……」と、どう対処すべきかを論理的に説明していたのが、最新のバージョンでは、「それは大変でしたね。先ずは、ゆっくりと休んで下さい……」と返事がくる。ただし、これまでの会話の仕方次第ではあるが。

従来も生成 AI は、蓄積された過去のデータに基づいて文章を作ることができたが、今やそれを越えて創造的な文章を作り出す能力を持つに至った。うまく活用すれば、非常に効率よく仕事をこなすことができるが、その反面多くのデメリットを持つのも事実である。創り出されたものを十分に検証しないと、事実を誤認することになりかねない。最大の問題点は、人間が自分で物を考えなくなることだろう。

しかし、負の面ばかりを見て毛嫌いしていると、積極的に利用している他との競争に負けてしまう。

結局は、データの収集や整理・編集などの「事務处理的な作業」は AI に任せ、生み出された結果に基づいてどう「判断するかの作業」が人間の役割であると考えるのが良いのではなからうか。

数年前までは、AI による社会的影響を物理的な面から捉えていたが、今や頭脳の作業の面で人間社会を大きく変えようとしている。